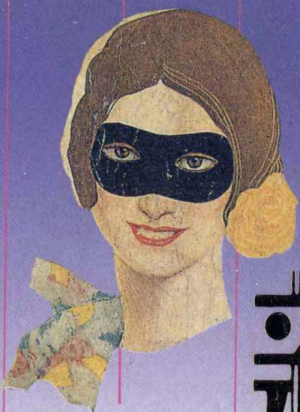


新書



傑作選

第五卷

読物・復刻・資料 編

監修 松本清張 水谷準 横溝正史
編集 中島河太郎



新書年

傑作選

第五卷

読物復刻資料編

監修 松本清張
編集 中島河太郎
横溝 正史

工業学院図書館
蔵書章

立風書房

新青年傑作選第五卷（新裝版）

一九九一年十月一日 第一刷発行

著 者 中島河太郎（代表）

発行者 鎌倉 豊

発行所 立風書房

東京都品川区東五反田三六一一八

郵便番号 一四一

電話 〇三（三四四七）一一九一

振替 東京五七四四九三

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

© 1969 K. NAKAJIMA Printed in Japan
ISBN4-651-50265-2

落丁・乱丁本はお取替えします

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社宛許諾を求めて下さい。

目

次

第一部 読物編

サム・カゴシマン・テキサス無宿 谷讓次 8

剣俠尼僧伝 佐藤春夫 24

空中樓閣の話 海野十三 48

モンテ・クリスト幽閉の島 木村毅 57

コンスタン・セント事件 森下雨村 71

西洋色豪伝 獅子文六 83

くらがり二十年 徳川夢声 98

ひまつぶし学 朝島雨之助 122

近世快人伝 夢野久作 139

魔術学 天城勝彦 150

近世香具師列伝 秘田余四郎 186

第二部 復刻編

36年型花咲爺 徳川夢声 210

ペーばーないふ 219

身替り花婿 阿部鞠哉 220

ひとりで夜読むな 230

いらはいいらはい放談会 236

諸家のカリカチュア 松野二夫 252

昭和七年・珍事総決算 258

フロア 271

アスファルト 272

縮刷図書館 274

阿呆宮 286

阿呆宮一千一夜譚 乾信二郎 310

シクシネシク 南部圭之助 322

すりい・もんきい 328

ヴオガンヴオグ 長谷川修一 332

第三部 資料編

「新青年」三十年史 中島河太郎 338

「新青年」所載作品総目録 中島河太郎 354

解題 中島河太郎 425

初山滋・吉田貫三郎・小山内龍・松野一夫ほか「新青年」より

装画 松野一夫

装幀 芦澤泰偉・北島裕道

新青年傑作選 5

讀物・資料編

第一部
読
物
編

サム・カゴシマ

谷 譲次

谷譲次は作家。本名長谷川海太郎。明治三年新潟県に生まれ、北海道で育った。中学在校中ストライキの首謀者として放校され、大正七年渡米、各地を放浪し、オハイオ・ノウザン大学に在学したこともある。

一年に帰国、谷譲次の筆名で「新青年」に『ヤング東郷』以下、新鮮なスタイルでメリケン・ジャップの生活を書いた。また林不忘の筆名で『丹下左膳』の、牧逸馬の筆名で『浴槽の花嫁』などの作品がある。昭和一〇年没。

北米インデアナ州E市。日本人経営の一晩中開けっ放しの料理店。売台の向うに白上衣を着て、早い朝刊の上に居眠りしているのは私。台所も寂然してサム・カゴシマのうたう俗歌が途切れ勝ちに聞えるばかり。

——いっさい現金。

——牡蠣始め申し候。

——当店独特のエスキモウ・パイ。

——鶏ア・ラ・ミカドを御試食あれ！

——御注告はすべて支配人へ。

——御家族同伴、風味卓絶。

その他いろいろ壁に貼ってある。夜一時半。戸外は雪。降誕祭へ三日——

前に自動車が停まって、三人連れの男がはいって来た。

舞踏会の帰途とでも見えて、礼装している。がやがや言いながら売台の中央へ眼白押しに並んで腰かけた。今頃の客にろくなやつのないことを承知している私は、眠いところを起された向っ腹を押えて、それでも愛想よく、

「いらっしやい——」

商売用の笑いが私の寝呆顔を歪める。三人いっしょに顔を上げた。驚いている。なんだ、ここは支那人の料理屋じゃないかと——

「お寒うございます。」と私。

「寒いね。」

「何か暖いものを召上りますか。」

すると、

「支那混煮をもらおうか。」とお互いに相談している。いよいよ上海楼にでも来た気であるらしい。

「支那料理はよしました。」と私。実は一度も出したことはないのである。が、よした、と言ったほうが客には当りがいい。

「焼麺もかい？」

「へえ。」

「フウヨンもかい？」

よく知っている。なかなか通だと見える。

「へい、お気の毒さま。」

「ヤコミンもない？」

くどい。私はむっとした。

「支那料理は全部 cutoff しました。」

「いつ？」

「昨日。」

「豚の尻尾もないのか。」

と一人が言った。わあっと三人が一度に笑った。豚の尻尾というのは、支那人の辮髪である。が、済まして私は、

「あれも昨日で cutoff しました。」

三人はあはあ笑っている。

「豚の尻尾ってなんだか知ってるかい？ 料理じゃないんだよ。」とそのうちの一人。

「——これでしよう。」

と私は後頭部へやった手を背中へ伸ばして見せる。三人は腹を抱えて笑い転げる。さっきからの不平が一度に爆発して、私は怒気心頭に発してしまった。こんなやつはなんとか言ってやらなければならない。さもないと癖になる。

「私は支那人じゃありません。」

悲痛な面持ちで私は宣言した。と、

「支那人じゃない？」と一人。

「じゃ、何国の人間なんだ？」と他の一人。

「日本人です。」

「日本人？」

「さよう。」

と私は反り返る。

「はっはっハ。」とよく笑う男だ。「日本人だって支那人だって同じじゃないか。」

とその調子がなんとも言えない侮辱を含んでいるのだ。

けしからん——

「お説の通り。」と私は冷然として、

「米国人だって猶太人だって黒人だって、みんな同じものですからな、全く。」

「なんだと？」

そら、怒った。もう笑ってはいられまいが——

「もう一べん言ってみろ。」

「何遍でも言うさ。米国人だって猶太人だって——」

「猶太人と同じとはなんだ！」と一人。

「黒人といっしょにされてたまるか。」と他の一人。

「失敬な——取消せ、失言を取消せ。」ともう一人のがどなり出す。

「失言じゃありますまい。」と私は飽くまで平然としている。喧嘩になったって驚かない。私はあまり強くないが、台所にいるサム・カゴシマは曲馬団の力業師として、全州から南北米を渡り歩いた強者である。こんな洒落者の一打ぐらいびくともするもんか。長らく喧嘩をしないので、食が進まなくて困ると、今日も彼はこぼしていた。つまりこの三人は親愛なるサム・カゴシマの食欲を増進させ

るためにわざわざ礼装して来た、食前の一杯みたいなものなのである。こうなると私は心強い。眠気もどこかへすっ飛んでしまった。

「日本人と支那人が同じ人間であるように米国人と猶太人も、これを広く言つてすべての白人と黒色人種ともその間なんらの——」

「相違がないというのか？」

「もちろん。」

「黙れッ。」

「黙らないよ。」

「お前は白人を侮辱しようとしているのか。」

「白人も何もあるもんか。白かろうが黒かろうが黄色かろうが——」

「みんな同じだと言うのか。」

「もちろん。みんな同じ人間じゃないか。」

と私は救世軍の士官のように両手を拡げて、ちらと台所のほうを見た。いる、いる。ドアの隙間からサム・カゴシマの眼が見える。大きな声に気がついて、さっきから覗いていたものらしい。自分の出を待ってむずむずしているに違いない。いざとなれば、私はちょっと台図さえすればいいのだ。

「失敬きわまる。」と一人が私を睨みつけた。怖くもなんともない。

「君らこそ失敬だ。僕は給仕人として雇われているだけで、君らを教育するのは僕の仕事じゃないんだけれど——」

「教育するとはなんだ？」

「日本人と支那人の違うところを見せて、実地教育を施してやると言うんだ。」

「何をっ。」と一人。

「殴るぞ、この豚の尻尾め。」

「あはははは、」とできるだけ豪そうに私は笑った。面白くなって来た。

「つまり喧嘩をしようと言うんでしょ、紳士諸君。よし、それが何よりの実物教育になる。が、あとで問題にならないように、この喧嘩は君達から先に手袋を投げたことを覚えておくがいい。よろしい、日本人と支那人とは少しばかり違うところを見せてやるから、三人とも上衣を脱いで腕まくりでもしろ。」

と、それから台所のほうへ向いて大声に私は呼んだ。

「オイ、サム、ちょっと手を貸してくれ。」

「なんだ。」

と、一杯に戸を開いて、汚れた料理服の小男が——の、そりと言いたいが、実はちよこちよこ出て来た。が、九歳のときに日本を出て、世界中を綱渡りや軽業や鉄棒振りで押廻つて来たこの臨時料理人には、鴉のような素走つこい緊張さが身体中に溢れていた。第一、顔が物凄い。黒くて傷だらけである。白い小さい帽子の下から長い頭髮が垂れ下がって、眼の上に丸く輪を画いている。身長よりも肩幅のほうが長い。お碗を伏せたような肉の塊りが関節から関節を縫いでいる。彼の自慢なのはこの身体と、独逸の田舎町

の市長から贈られたメダルだ。メダルはともかく、身体は自慢に値する。腕力のある点に到っては、私は彼を一種の不具者と見ていたくらいだ。そのサムが両腕を胸へ組んで、今も言う通り三人の前に立ったのである——背が低いから、向うからは立っているように見えなかったかもしれない。が、ただにやにや笑っているのだから、三人はいささか気味が悪くなったと見える。何しろ墨西哥人と亜米利加印度人と日本人は、そもそも何をするかしたもんじやない。

ことにこの男は変わっているぞ。

いきなり咽喉笛へ飛びつく気かもしれない。

ズ——その前にまず鼻へ噛みつくだろう。

ジュジュツ！

そうだ、きつと足で変なことをして、まず床板を嘗めさせておいて、それから耳から手を入れて足の小指を一生涯役に立たないようにするに相違ない。

ジュジュツ！

もしこの礫のような男が日本人であるとすれば、例の妖術ジュジュツを使うに違いない。そうだ、あの手だ。

すると？

するとちよつと危険だぞ。

待て、上衣を脱ぐのは待て——

三人は鉛紐へ手を掛けたまま、黙ってサムと私を見比べている。

沈黙。

「Well——」

とサム・カゴシマは私を振り返って言った。断っておくが、この男は日本語はさよならと万歳ぐらいしか知らないのである。

「用というのは何だね。」

「この三人の紳士は。」と私は始める。

「日本人と支那人の相違を研究しに来られたんだそうだ。

どうだい、サム、三人を逆さに突っ立てて上げたら？ それとも頭の毛で部屋を大掃除するのでしょうか。」

「ははあ。」と笑いながら、サムは三人を見廻した。と一人が気軽に拳手の礼をして、

「今晚は。」と言った。

「今晚は。」とあとの二人も追っ掛けて言った。

「なるほど。」とサムはいかにも強そうに肩を揺り上げて、

「Athen——」と一つ英語で咳払いをした。

「して、お前たちの用意はそれでいいのかい。時計やなんか毀れ物は、この人に預けとくがいいぜ。」

と私を頤でしゃくる。三人は眼を円くしている。痛快痛快、と私は心の中で手を叩いた。

すると、

「いや、」とそのうちの一人が妙に改まって、

「もう解りました。」

続いて他の一人も、

「これでたくさんです。実地教育には及ばないよ。」

「ともかく今夜はよそう。もうだいたいぶ晩い。」とあとの一

人も口を出した。

「なに、すぐ済むんだ。別に大したこっちゃない。」とサム。

「でも、解ったのだから、それには及ばない。」と一人。

「そう早く解るはずはない。」と私も言葉を入れて、「折角その目的で来たんだから、見せてもらって行くがいいでしょう。この人は私より適任なんです。」

「ごもっとも。が、いずれ他日に譲るとしましょう。」

「割愛割愛。」

「僕には判然解った。日本人と支那人の相違が僕にはよく合点がいった。」

と三人はばかに親しそうな顔付きをする。

「惜しいなあ、いい機会だがなあ——」

とおかしいのを耐えて私が言うのと、

「実に残念です。」

と一人が実に残念そうに舌打ちした。

「では——」

とサム・カゴシマが州知事選挙の候補者みたいな大声を出した。

「では、少しばかり日本人の遊戯を御覧に入れます。」

「いや、もうたくさん——」

と相手が言い切らないうちに、サムの身体は棒のように垂直に三人の鼻先の売台の上に逆立ちしていた。こんなことは朝めし前なのである。料理はでたらめだが、軽業と来ると真物なのだ。何しろ独逸の市長が自身メダルを贈呈す

るくらいだから——はっ、こどもと御覧に入れますのは、と私は頭の中で大声を発しながら、三人の米国人を眺めた。サムが台へ手を掛けたとき、二人は駭いて立ち上がったのだ。だから、不幸な一人だけがサムの顔の傍でいやに固く恐入っている。サムは手を縮めて身体を低くした。と、大変なことが起った。

売台から二尺ほど離れてニッケル製の珈琲沸しが立っている。四六時中瓦斯が点いていて、ぐらぐら煮え立った珈琲は覆の隙から白い蒸気を吹いていた。頭頂は床から一間ほどあって、売台からは確かに三尺は高い。その珈琲沸しの上へ、はすかにサムが逆立ちのまま飛び移ったのである。私ははっとした。三人もあつとかぎやつとか言ったように記憶えている。

上でサムは片手を離した。やがて、身体を横にして、覆と同じ高さまでへの形に下がって来た。そして片手で横ざまに覆の握りを掴んだまま、横一文字の身体を空中でぐるぐると二三回廻したと思うと、ぱっと三人の前の売台へ音もなく足から先に帰って来て、そこで両脚を拡げてべちゃんこになって見せてから、軽く降り立ってなんにも言わずに台所へはいって行ったのである。

四人——三人と私——は呆気にと取られて台所の戸がだんだん小さく揺れてやがて止まるのを、黙って見守っていた。が、私はすぐ私の地位に気がついた。

「どうです。」

と私は言った。三人はいっしょに私の顔を見ると、あわ

てて献立表へ眼を落した。

「解りましたか。」

と私は大得意だった。三人は物も言えない。白い小布を持ち直して、従順そのものの給仕人らしく、私は三人の前に立った。

「御注文は？」

サム・カゴシマの俗歌が台所から長閑に聞えていた。

(大正十四年十二月号)

テキサス無宿

谷 譲次

「日本も変わったろうなあ——俺がこの国へ来たのは御慶事二年前だからなあ。」

空気をかえる煽風器の音。流しの上の壁に径二尺ぐらいの穴があいていて、重い鉄の羽が猛烈な響きを立てて廻転している。秋の午後の陽が薄くぼやけて、その穴から丸い光線の筒をこの台所へ落しているだけ、煽風器の存在は戸外の見える邪魔にはならない。それほど速力で廻っているのだ。

皿の音、肉の焼ける臭い、油の焦げる煙、鍋を抛り出す反響、註文を通す給仕人の声、となり返す料理人の呪語、その合間あいまに遠く食堂のほうから、流行の「もしお前は俺が固煮の卵子だと知ったなら、お前はきつとどこかよその柔かい卵を探しはじめることであらうよ。おお、わが赤んぼよ」——面白おかしくもない——とかなんとかいう上海と布哇と紐育を一つにして、それを前髪で割ってらっぱずぱんとステコムで掛けたような狐駆足のジャズが聞えてくる。正面に一系列の瓦斯ストーヴと蒸釜、その前に肉、台、右に硝子洗場、左に野菜場、白衣白帽の大部分が

この料理店フィッツジェラルドの台所を右往左往に駆けまわっている。私もその一人だ。白状して地位を明白にしておくが、私は皿洗いの助手なのである。

皿洗いに助手つてのも大げさで変だが、皿洗いだって手で洗うんじゃないくて機械を使うんだから、一個の立派な機関士だ、だから Handy-man-all-around-the-kitchen たる私もその助手ぐらいのところまでには出世できるわけになる。皿洗いの機械というのはこの亜米利加でも古さい、私がオハイオ州クリヴランド市ユウクリッド街のエッシイ料理店で大学の夏季休暇を皿洗いに雇われて行っているとき、その親方が大得意で一台据えつけたのが普遍化された最初のように記憶えている。親方はその機械がだいぶ自慢だったとみえて、かわるがわる常客を台所へ引張って来ては、私と愛蘭土人のマイキが把手をとっているとところを見せたものだった。一通り食べ残りを浚い落した皿を鉄製の網へ納めて熱湯の箱へ沈めると、電気仕掛けで強く上下動して皿を綺麗に洗うという仕組みだったようだ。皿ばかりじゃなく、銀物類でもなんでもこうして洗えたからおおいに助かった。それまでは流しに湯を張ってその中へ石鹼と曹達を溶かし込んで手でごしごしやっただから、皿洗いをするたびに両手の爪が白くふやけておしまいには擦り切れて気もちも悪いし気まわりもよくないし、おおいに困ったものだったが、この機械ができてからは能率は何倍も上るし、第一仕事が楽になって週二十ドルの給料